

「活気」にあふれた いかわねのイベント

紅葉が美しい秋の季節に、いかわねでは様々なイベントが開催されました。今年は新型コロナウイルスの影響から開催が取りやめとなったイベントもありましたが、徹底した感染予防対策のもとで開催にこぎ着け、いかわねに賑わいを生み出しました。



ツラくも楽しかったMAMM2020

令和2年10月25日(日)川根本町の山林を巡る「南アルプスマウンテンマラソン2020(MAMM)」が開催されました。多くの大会の開催が中止される中、マスクの着用やソーシャルディスタンスの確保などを徹底し行われた本大会。主催者、参加者それぞれの協力があり無事終了することができました。地図やコンパスを使ったナビゲーションの要素が追加された今回は、コース内容は厳しく、制限時間内にゴールできない参加者もいましたが、苦しさを乗り越えゴールした参加者の顔には笑顔が満ち溢れていました。



トレランコース完成記念イベント

令和2年11月14日(土)～15日(日)、静岡市南アルプスユネスコエコパーク井川自然の家でトレイルランニングコース完成記念イベントが開催されました。1日目に竹を使った飯盒作りや火起こしを体験、2日目には8kmと20kmのコースをペア・グループで走り抜けました。参加者からは「落ち葉でふかふかのトレイルを走り、秋の井川を満喫することができた。別の季節にも来てみたい!」等の声がありました。

紅茶がつなぐ井川・川根 2人の地域への想い



望月将悟さん(左)と益井悦郎さん(右)

南アルプスの雄として有名な望月将悟さん。日本海から太平洋へ日本アルプスを縦断する山岳レース「TJAR」四連覇など数々の偉業を成し遂げています。そんな望月さんが今回紹介してくれたのは、場所を里山に移した「紅茶」にまつわるお話。望月さんの出身地井川ではお茶の生産が盛んで、益井悦郎さんは「益井園」の益井



悦郎さんが製造する最高品質の紅茶ということですが、緑茶だけでなく紅茶でも最高金賞を受賞するなどまさに国産紅茶のバイオニア。井川と川根を代表する2人によって生まれた紅茶。そこには地域への思いが込められています。「自分たちの取組が井川と川根ふたつの地域をつなぐ新たなきっかけとして知ってもらえれば」と謙虚に語る望月さん。「新しいことのお手伝いをしたい。地元のちよつとしたことでも世界に通じる素晴らしいものがあることを伝えたい」と地域を想う益井さん。

山々に囲まれたいかわねでは、シカやイノシシなどに農作物・人工林が荒らされる鳥獣被害が、地域の課題のひとつとなっています。川根本町の池ノ谷地区に住む大村雄一郎さんは、町猟友会の副会長として、狩猟による獣の個体数調整に取り組んでいます。「狩猟を始めたのは、地元に戻ってきた約40年前。当時、沢口山の頂上付近まで探さないといなかったシカが、最近

いかわねの人々 Vol.15 大村雄一郎さん (川根本町)



では家のすぐ近くでも見かけるようになった」と、獣の頭数の増加を肌で感じると話します。11月から3月までの猟期中は、ほぼ毎週末、6名ほどのグループで狩猟を行っています。1人が猟犬で獣を追い込み、待ち構えた残りの数人が鉄砲で仕留める「巻き狩り」に、1日ばかりで取り組めます。「長年の経験に基づいて逃げ道を予想しても、相手は想定外の動きで必死に逃げるので、取り逃がすことも珍しくはありません。今、町猟友会は、高齢化と後継者不足という課題に直面しています。「自分自身が先輩方に教わってきたように、狩猟の技術は、現場でしか得られないことがたくさんある。自分はまだ動ける今のうちに、若手猟師とできるだけ一緒に山を歩いていきたい。」

地域の期待に応えるため、そして、狩猟の文化を次世代へ伝えていくため、大村さんはこの冬も、相棒の「ボーちゃん」とともに山へと向かっていきます。



井川湖渡船祭り

令和2年11月15日(日)に井川湖渡船祭りが開催されました。当日は、いかわね新聞No.14で紹介した新船「令和聖」で紅葉に彩られた井川湖上を周遊する「船上紅葉狩り茶会」を実施。船内では、井川茶と在来作物を使用したクッキーがふるまわれ、乗船者は五感で秋の井川を満喫していました。指定された撮影スポットを巡るフォトラリーも開催され、参加者は家族や友人たちと井川の色々な場所を撮影し、てしまんく最中などの特産品を獲得していました。



「家にあつたモンペや着なくなった着物で作った」「可愛い生地を買ってきて飾りやフタをつけアレンジしている」



「家にあつたモンペや着なくなった着物で作った」「可愛い生地を買ってきて飾りやフタをつけアレンジしている」



井川には昔から山仕事などでお弁当を持って行く際に使うカバンがあります。名前は「じんきち」、形はシンプルな紐のついた袋状の背負い袋で一般的にはナップサックと呼ばれるものです。最初に使っていた人の名前が「じんきちさん」だったという話をよく聞きますが詳細は不明。昭和の始めにはもう使っていた、と親世代の話をしてくださる人もいました。

じんきち 昔ながらのエコバッグ

など、思い思いに楽しみながら手作りされているじんきち。今も現役で山へ行く時に使っているという森林組合の職員さんもいましたが、最近では買物の際エコバッグとして使っているという人が多くいます。背負うと両手があいて使い勝手のいい、井川の昔ながらのエコバッグ。これからの長い冬のお家時間、「マイじんきち」作ってみませんか。

